



映画のオープニングシーンとなったおろち峠のループ橋展望台からの眺め。ロケ地めぐりもここからスタートするのがおすすめです。



チームメイトのサワの実家となった大福寺の鐘付き堂とケヤキの大木。葉が茂っている時はループ橋展望台からも見つけることができます。



巧と青波が自転車で2人乗りして下ってくる備中松山城遊歩道近くの坂道。軟式ボールを握りしめた青波の手が印象的でした。



ロケ地めぐりで多くの観光客が高梁を訪れてくれることが大きな喜びと語る「たかはしフィルム・コミッション」の石井会長。

映画『バッテリー』のロケ地へ

岡山県 高梁市



【物語】中学入学を控え、家族で岡山県に引っ越してきた原田巧。巧はピッチャーの素養に優れ、同級生の永倉豪とバッテリーを組み、中学校の野球部に入部する。しかし、部活に馴染めず、さらには病弱の弟、青波のことを気遣いながらも、巧はチームメイトとともに野球への熱い想いを全うする。

『バッテリー』/DVD¥2,800(税抜)/発売元・販売元:株式会社KADOKAWA

美しい山間の
小さな城下町の風景に
白球にかけた青春と友情が
よみがえる。

映画のオープニングにあらわれるおろち峠のループ橋展望台から見下ろす高梁の街。四方を山に囲まれて、大小の川が流れ、そのしっとりとした佇まいに多くの人魅せられ、何かを期待します。映画『バッテリー』は、そんな想いに応えるように青春と友情あふれる物語を高梁の日常風景の中に昇華させた作品です。



美しい景観と文化財をめぐる石火矢町ふるさと村

かつて備中(岡山県西部)の小京都と呼ばれ、高梁川の交易で栄華を誇った高梁市。天空の山城として有名な備中松山城を擁するその城下町には、藩政時代を偲ばせる古い武家屋敷や寺社が点在しています。

なかでも、白壁の長屋門や土堀がつづく石火矢町は岡山県より「石火矢町ふるさと村」の指定を受け、江戸時代に建てられた旧塙原家住宅と旧折井家住宅が公開されています。さらに、近くには小堀遠州作庭園で知られる頼久寺があり、城下町らしい景観の中、ゆったりと散策が楽しめます。



武家屋敷・旧折井家
石火矢町ふるさと村は、江戸時代中期から後期に建てられた武家屋敷が約250mにわたって並び、当時は120~150石取りの武士が住んでいました。約180年前に建てられた旧折井家の書院造りの母屋では当時の暮らしがうかがえます。



頼久寺の庭園
父の遺領一万石を継いで当地に住み、頼久寺を飯の館とした小堀遠州の作庭による蓬萊式枯山水。



備中松山城・猫城主さんじゅーろー
平成30年の7月豪雨の後、備中松山城に住み着き、今は猫城主におさまっているさんじゅーろー。人なつこく、カメラを向けるとポーズをとることもあるそうです。提供(一社)高梁市観光協会

いっぷくスポット

VicchuNutGriglia ヴィッチュナッツ・グリッパ

巧の家でイタリア家庭料理が楽しめる!?

巧の家として登場する古いお屋敷のはなれを利用して平成29年4月にオープンしたヴィッチュナッツ・グリッパ。特注炭火オープンを使った炭火焼き料理が人気です。Tポーンステーキや骨付き地鶏など肉料理をはじめ、手打ちパスタやピッツァ、スイーツまで本場仕込みのイタリアンが楽しめます。2階にはゆっくりとくつろげる座敷もあって気取らない雰囲気素敵です。

- DATA 岡山県高梁市内上下47
- 0866-45-3154
- 12:00~14:00・18:00~LAST ※前日までの完全予約制
- 不定休
- 武家屋敷館駐車場や高梁市観光駐車場をご利用ください。



ピッツァ・フリッタ
地元高校生たちに人気の揚げピザ。味はトマトソースかアップルシナモンが選べて、クラムチャウダー付き。

骨付き地鶏の炭火焼き(要予約)
骨付鳥・手羽先・豚ロース・ポテトが入ってボリューム満点。

日常の風景に心惹かれる城下町

武家屋敷の前をゆるやかに下っていく一本の古道。それは、野球を愛する兄弟の純粋な気持ちを受け止められずに苦悩する母、真紀子の気持ちを暗示しているかのようです。

ロケ地は、ストーリーや登場人物の心情をも映す映画づくりの重要な要素です。2006年冬に、高梁市に持ち込まれた映画『バッテリー』の話は、それまで数々の映画やドラマの舞台となった地元にとって特別なものではありませんでした。しかし、「原作のイメージや監督の要望に応える撮影場所は容易に見つからず、いわば偶然の巡り合わせのように決まりました」と、たかはしフィルム・コミッション会長の石井雅之さんは当時を振り返ります。

監督自ら高梁市を訪れたロケハンでは撮影の候補地をいくつか案内しましたが、残念ながらイメージにあうところはありませんでした。しかし、その道すがら川沿いの古い屋敷が監督の目に止まりました。それが映画では巧たち家族が暮らす家として登場します。

学校の正門へとつづく通学路を横切るJR伯備線の踏切や、巧と青波が自転車で一気に下る坂道、街を一望するループ橋からの眺めなど、高梁の何気ない日常の風景が監督の心をつかみ創作意欲を大いに刺激することとなりました。地元の人たちにとって、見慣れたごく普通の景色こそが、監督が求めていたロケーションだったのです。